

笹原宏之氏 博士（文学）学位請求論文

『国字の位相と展開』

審査報告要旨

本論文は、日本で造った漢字である国字について、その発生の事情から現代における広がりまでを視野に収めた包括的かつ記述的な考察である。全体は、序章、本論に相当する第一部・第二部・第三部、終章に大別される。序章では、本研究における術語の概念規定ほか方法論的な見解が示される。終章では、国字および国字研究の展望が行われる。

本論の第一部（第一章 第三章） 国字とは何か は、これまでの国字研究の検討を踏まえ、漢字と国字の境界について考察し、国字発生の要因を分析する。第二部（第四章 第六章） 国字の位相 では、国字に個人文字・地域文字・位相文字などの種々のレベルがあることが論証される。第三部（第七章 第八章） 国字の展開 は、種々の位相文字が他のレベルの文字に展開していく様相を記述したものである。

第一部の第一章「国字の定義と分類」では、新井白石『同文通考』、伴直方『国字考』などの検討を踏まえ、国字を「中国において造出された漢字をもとに日本人が創造した漢字」と定義する。この基準に照らして問題となる字が中国製か日本製かということに関して、著者は「佚存文字」「暗合」「衝突」などの概念を設け、厳密な判定を行う。また、これまでの「異体字」という概念についても、実際の用法に即して検討を試みる。すなわち、この章で著者の国字研究の方法論が遺憾なく展開され、従来の研究の水準を超えるものとなることが保障される。

第二章「国字の発生」は、奈良時代より以前に国字が生まれていること、それが文字を必要とする社会の要請に基づくことなどを述べる。ここでは、新しい文字の発生に見られる種々の要因と型の分析に特色が見られる。また、中国のみならず朝鮮において新字が発生する際の事情をも背景に置くことで、説得力のあるものとなっている。

第三章「国字の使用範囲による分類」では、文字が使用される範囲を時間・空間・使用主体の三方面から多元的にとらえることを目的とする。すなわち、位相という概念を導入することにより、文字使用の時代的な変遷の動態、地域的な分布の状況、社会的な集団の使用動向などを総合的に把握しようとする。その結果として、個人文字、地域文字、位相文字、一般的な文字という分類が可能となることを証明する。これにより、第二部および第三部の分析的な記述の基盤が構成されることになる。

第二部は、第四章「個人文字」、第五章「地域文字」、第六章「位相文字」の各章で、記述的な研究成果が展開される。まず、個人文字については、江戸時代の思想家である安藤昌益の著書を対象とし、個人が文字を造ることの実態を分析する。それにより、特定の個人の造字行為がその個人にとどまらず、地域文字、位相文字に展開する可能性のあることを指摘する。

地域文字についての記述は、本論文の圧巻である。日本の地名表記に用いられる漢字の概観から始まり、字体と音訓による用法との徹底的な分析により、同一・類似の字形を持つ文字が各地に分布し、それぞれの地域において占める位置を明確にする。さらに、同一の地形名に種々の字形をもつ国字が存在することの意味を、全国的な視野からと特定の地域における分布の実態から総合的に考察する。これまで、単にある地域における特殊な文字として報告されていた国字がこれにより体系的にとらえられるようになったことが成果である。

位相文字については、歴史的な考察を行った後に、学者、図書館関係者、警察関係者、宗教関係者などの社会的な集団による造字および使用の実態が記述される。それらをもとに、漢和辞典やコンピューターにおいて、そのような集団使用文字が一般的な文字に転成していく状況が報告される。また、ある社会における文字使用が種々の集団や階層により多元的に構成される様相が詳述される。

それに続く第三部には、第七章「個人文字から位相文字へ・位相文字から一般的な国字へ」、第八章「コンピューターにかかわる展開」の二章が置かれる。第二章において指摘された個人文字や位相文字が一般的な文字に転成する様相がさらに詳しく描かれる。

第七章では、学者による個人の造字が一般的な文字になる過程、気象関係者の造字によるメートル法単位を表す国字が国内のみならず中国・朝鮮にも広まる過程が明らかにされる。さらに、それが第二次大戦後衰退し、位相文字からさらに死字に至る経過が記述される。ここで注目されるのは、国字を日本の文字としてだけとらえるのではなく、いわゆる漢字文化圏全体を視野の内に収めて位置づけようとする姿勢である。また、第八章では、情報化社会におけるコンピューターによる文字使用が国字をどのように位置づけたか、一種の位相文字とみなされるコンピューター文字がどのように一般化していくかという展開が対象となる。そこでは、そのような用字行動がさらに新たな国字を発生する要因となることも指摘される。

すなわち、本論文は国字に関する初めての総合的かつ画期的な研究成果と言って過言ではない。古代の文献から現代の電子媒体による文字データに至る広範な資料を渉猟し、国内のみならず東アジアの諸地域における文字使用をも考察の範囲に含めた研究態度には、間然する所がない。また、その方法は文字論の理論的な裏づけを持ち、単に国字の研究として優れた水準に達したのみならず、日本の漢字研究そのものを進展させたものとして高く評価される。以上により、本論文が博士（文学）の学位授与にふさわしいものであることを認めるものである。

2005 年 4 月 26 日

主任審査委員	早稲田大学教授	野村 雅昭
	早稲田大学教授	高梨 信博
	早稲田大学教授	上野 和昭
	早稲田大学教授	古屋 昭弘